



# 東京2020五輪 文化プログラムの 全国展開で地域に活力を

全国市長会は6月7日、全国都市会館において「市長フォーラム2016」を開催しました。

フォーラムでは、森民夫全国市長会会長が開会あいさつを行った後、「東京2020五輪 文化プログラムの全国展開で地域に活力を」と題して、ニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏氏による講演が行われました。吉本氏はオリンピックと文化の関係、ロンドン五輪での文化プログラムの概要と実績、東京五輪の文化プログラムの実現に向けた動き、全国展開に向けたアイデアなどを説明され、市長をはじめとした約720名の参加者が耳を傾けました。さらに、講演の後には、出席市長との活発な意見交換も行われました。

ここでは、講演の様様をお届けします。



## 東京2020五輪

## 文化プログラムの全国展開で地域に活力を

ニッセイ基礎研究所研究理事

よしもとみつひろ  
吉本光宏

## オリンピックと文化の関係

東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会）の開催が4年後に迫ってきました。今夏に行われるリオ大会が終了すると、いよいよ東京大会の文化プログラムがスタートする予定になっています。

オリンピックというと、スポーツの祭典というイメージが強いと思いますが、実は文化の祭典という側面もあります。まずはオリンピックと文化の関係についてお話しします。

オリンピックの基本的な考え方を示したオリンピック憲章の根本原則第1には、「オリンピックはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を追求するものである」と明記されています。加えて、その第5章には「組織委員会は少なくともオリンピックの開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すものとする」と記されています。そもそも、近代オリンピックの祖であるクーベルタン男爵も「The Olympics is the wedding of sport and

art」という言葉を残すなど、スポーツと文化の融合を重視していました。

オリンピックで文化プログラムが行われるようになったのは、1912年ストックホルム大会からです。当時は絵画、彫刻、建築、音楽、文学の5つの分野の「芸術競技」として行われ、優秀な作品にはメダルが授与されました。しかし、芸術分野において競い合うという形式はなじまないこと、また欧米のアーティストが中心になりがちであることなど、さまざまな問題があったことから、1952年のヘルシンキ大会からは、同じ5分野での「芸術展示」に切り換えられました。1964年に開催された東京大会においても、日本最高の芸術品を展示するという方針の下、美術・芸能部門の合計10分野で展覧会や公演が実施されました。

文化プログラムがさらに充実する契機になったのが、1992年のバルセロナ大会です。同大会では、ソウル大会が終了した1988年から4年間にわたる文化プログラムを展開しました。以降、こうした複数年にわたって実施する

方式が定着します。

そして、これまでをはるかにしのぐ規模と内容の文化プログラムを展開したのが、前回のロンドン大会でした。このロンドン大会のレガシーを東京はいかに引き継ぐのか、世界中が注目しています。

## ロンドン大会の文化プログラムの成果

ロンドン大会の文化プログラムは北京大会終了直後から4年間を掛けて行われました。そのフィナーレとして、2012年夏には、大会期間を含む12週間にわたって、ロンドン2012フェスティバル（以下、ロンドンフェスティバル）が開催されました。

ロンドン大会の文化プログラムが目指したのは、英国の誰もがロンドン大会に参加できるチャンスを提供すること。そして、あらゆる文化に共通する創造性を、とりわけ若者たちに喚起させることでした。加えて、イギリスの文化を世界に紹介するだけでなく、オリンピックの文化プログラムに参加する機会を世界中の



アーティストに提供することも重視されました。結果として、文化プログラムに参加したアーティスト数は、アスリートと同じ204の国・地域から4万464名、そのうちロンドンフェスティバルに参加したアーティストは2万5000名に及びます。

さらに、イベント総数は11万7717件。新作委嘱は5370作品。地方小都市や町村を含め、英国全土1000カ所以上で開催され、参加者数は4340万人に上るなど、かつてない規模と内容の文化プログラムとなりました。

プロジェクトの具体的な内容もご紹介しましょう。まずはロンドンフェスティバルについてです。このフェスティバルで最も話題になったひとつに、「Piccadilly Circus Circus」があります。ロンドン随一の繁華街であるピカデリー

サーカスを会場にするため、一帯を通行止めにして、17カ国から招いた240名以上のサーカス・アーティストが終日サーカスを上演しました。ちなみに、この通りが通行止めにされたのは、1945年の第二次世界大戦の戦勝パレード以来のことでした。

また、ロンドン市内にある歴史的な人物の彫像に帽子をかぶせる「HATWALK」も話題になりました。このイベントのために全部で21の彫像が選び出されましたが、中でも人々の目を引いたのは、地上52mにあるネルソン提督の彫像でした。帽子をかぶせるために、英国内に2台しかないといわれる超大型のクレーンが用いられました。さらに、開会式に合わせて、4つの国会議事堂、個人所有のベル、専用アプリ「リングトーン」を用いて、一斉にベルを鳴らす「The Bells」には、約290万

の人が参加しました。

### 地域の独自性を踏まえたプログラムの展開

地方都市の取り組みも見てみましょう。ロンドン大会では、ロンドンを含めて全国を12の地域に分けて、それぞれの地域に配置した専門家（クリエイティブ・プログラマー）が組織委員会と連携し、各地の独自性を踏まえた文化プログラムが行われました。

ロンドンから鉄道で1時間半ほどに位置するバーミンガムを中心とするウェスト・ミッドランズでは、986のプロジェクトの下、イベント・活動数は1万1450件に及び、参加者数は290万人に至りました。

ひととき注目を集めたプロジェクトは、作曲家シユトツクハウゼンによるオペラ「光からの水曜」の上演でした。オペラそのものに実現が困難な要素が多く、これまで上演が見送られていた作品でしたが、世界初演にこぎつけたことで、国内外から多くの観客が訪れました。一方で、文化とスポーツの両方を行う「コミュニティ・ゲームズ」をはじめ、参加型の文化イベントも多く行われました。ちなみにこの地域では、文化施設や芸術機関、市町村にとどまらず、中学校、高校、図書館、子どもセンター、教会など、700ほどのセクターが文化プログラムの主催機関としてロンドン大会に参加しました。

もう一つ、地方都市として、スコットランドの例も紹介します。スコットランドで行われた催しの中で、最も私の印象に残ったのが、「ビッグ・コンサート」という音楽イベントです。スコットランドの中でも、人口3000人ほどという最も小規模なまちの子どもたちが、ベネズエラ出身の世界的な指揮者・グスタヴ・デュダメルと、彼が指揮するオーケストラと共演するということです。当日は本格的な降雨に見舞われたにもかかわらず、野外会場には地域の人たちをはじめ、7000人が来場。国際的に活躍する指揮者・オーケストラとともに演奏する

## 東京大会・ 文化プログラムに向けた私案

さて、冒頭で申し上げたように、リオ大会が終了すると、東京大会の文化プログラムが始まる予定となっています。現在、東京大会の文化プログラムを準備しているのは、組織委員会、内閣官房、文化庁・文部科学省(スポーツ庁)、東京都、外務省/国際交流基金、パラリンピック・サポートセンターなどの機関です。それぞれが文化プログラムのコアやオリンピック・パラリンピック教育の具体的な検討、方針の策定などに取り組んでいます。

例えば東京都では、「これまでにない多彩で魅力的な史上最高の文化プログラムを展開します」「あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤の構築を進めます」「東京の持つポテンシャルを活用し、芸術文化の魅力を世界に発信します」の3つを取り組みの方向性として定め、これらに基づいた事業を進めることとしています。また、内閣官房では2020年以降を見据えた文化プログラムの推進について「beyond 2020プログラム」に定めたほか、文化庁では同プログラムの下で、「文化力プロジェクト(仮称)」の推進に取り組む予定としています。

こうした国の方針、取り組みを踏まえて、いかに文化プログラムを全国展開すべきなのか。最後に、私案をいくつか申し述べたいと思います。

まず、一過性のイベントに終わらせないためにも、壮大なビジョンが欠かせません。その観点から私が考えたのが「文化から世界の未来を



子どもたちの姿に多くの人が感動し、「子どもたちを誇りに感じた」という声が多数寄せられるなど、地域の活力創出につながりました。

ロンドン大会終了後、若者を対象に実施した調査によれば、ロンドン大会や一連の文化プログラムについて、「英国に前向きな変化をもたらした」(84%)、「若者たちの人生を変容させた」(61%)、「(今後)地域の芸術文化団体に参加する」(65%)と答えるなど、若者に大きな影響を与えたことが明らかになっています。

切り拓く」というものです。芸術文化には世界と未来を変える力がある。そして、文化の「日本」を再発見し、国際的なアピールと協働を推進する。こうした思いを込めています。

次に、このビジョンに基づいたアイデアとして、3つの枠組みでプログラムを考えてみました。1つ目は「アートサイト日本2020 without Tokyo」。全国各地の文化的リソースを開催年に合わせて2020件ほど、伝統的、現代的にかかわらず、分野横断的に幅広く選出し、日本文化の多様性とポテンシャルを世界にアピールします。同時に文化観光や地域の活力創出にもつなげていくことを目指します。

では、どのように世界へアピールするのか。私はオリンピックに参加するあらゆる国・地域の言語に対応できる紹介サイトをつくることを提案したいと思います。それも、画像だけではなく、ぜひ映像も活用していただきたい。私の故郷の徳島県は今後の政策方針を示すため、東京とは異なる独自の価値観を「東京」として紹介する映像を制作し、HP上に公開しています。私自身も拝見しましたが、徳島出身であることが誇りに感じるとともに、地域文化のアピールは、地域の誇りを取り戻し、それが地域の活力創出にもつながることを再認識しました。

## 最大のレガシーは「人材育成」

2つ目の枠組みは「クリエイティブ・フロント東京/日本」です。国内外のアーティストにプロポーザルと新作委嘱を大々的に実施するこ

とで、アーティストの夢の実現できる都市「東京」、世界の芸術をけん引する国「日本」を実現させていきます。しかも、単に日本文化を紹介するだけでなく、特にアジア諸国から多くのアーティストを招き、日本との共同制作を推進する機会になればと考えます。

これまで、世界の芸術、文化の中心はパリ、ロンドン、ニューヨークなど、欧米の都市ばかりでした。東京大会の文化プログラムを、芸術の中心をアジアの都市に移す契機にできないかというのが、このアイデアの背景にあります。

3つ目は「日本人は皆アーティストだ！」です。実は、日本には他国にはない文化的な特性、強みがあります。それが明らかになったのが、2020年にロンドン大会の文化プログラムの一環として開催されたWorld City Cultural Summitでした。このサミットでは世界の12の都市の文化的特性が比較されたのですが、東京に関しては「一般家庭の保有するピアノの台数・83万台」「お茶やお花を日常的に楽しんでいる市民の数・46万人」「アマチュアのダンススクールの数・748件」「新聞の発行部数は540万部で主要紙には俳句コーナーが設けられ、膨大な数の俳句が投稿されている」といったデータが他の都市の方々に驚かせました。つまり、東京(日本)では、市民自身が芸術の消費者(鑑賞者)であると同時に、芸術の創造者(芸術家)であるということが諸外国にはない文化的な強みだということがわかったのです。

そうした特性を基に、3つの具体的な参加

型プログラムを考えました。1つは「鳴り響け1000万台のピアノ」です。東京都内の一般家庭だけで83万台のピアノがあるということは、全国の一般家庭、学校、劇場・ホール、福祉施設、病院などを含めれば、1000万台以上のピアノがあるでしょう。そこで、開会式のセレモニーの一環として、一斉にそれらのピアノで開会式のテーマソングを全国で演奏するというプロジェクトです。

2つ目は「250万人の歓喜の歌」。おそらく日本人ほど第九を歌うのが好きな国民はいません。さらに、2020年はベートーベン誕生250年にあたることから、パラリンピックの閉会に合わせて、全国で250万人の人が第九の歓喜の歌を合唱するというアイデアです。

3つ目が「日本縦断BON DANCE」。日本人なら誰にもなじみがある「盆踊り」を、東京大会のオリンピックとパラリンピックのインターバル期間に全国各地で展開したらどうかというものです。中には伝統的な盆踊りがすたれた地域もあるでしょうが、これを機会に盆踊りの復活や新作に取り組むことができれば、地域文化の振興につながると考えます。

日本は世界のどの国も経験したことがない、超高齢社会に入っています。しかし、高齢者でも文化プログラムに参加することは可能です。一連の文化プログラムを通じて、年齢あるいは障がいのあるなしにかかわらず、老若男女が参加できれば、「老いても文化で豊かに元気な日本」をアピールできるのではないかと思います。

近年のオリンピックでは、どのようなレガシーを残すことができるかが重視されます。私は、文化プログラムを実施することで、文化による地域活力の創出を担う人材を育成できるところが最大のレガシーであると考えます。すなわち、2020年の東京大会を、以降のスポーツ・文化・教育を通じた新たな成熟社会の実現につながる契機にすることが重要で、それは全国各地で展開が可能ならずです。本日は、ご清聴、ありがとうございました。

